

成功は失敗の元、失敗は成功の元へゲームの指導から

岡 篤（兵庫）

一 ゲームを学級経営に

私は、折々にゲームを行います。年度始めのちよつとした隙間時間や、月に一回の誕生会、あるいは「ルールを守る練習」、「友達の気持ちを理解する練習」などといった道徳の時間に行うときもあります。

ゲームは、本来楽しむものです。前述のような「ルール」や「友達の気持ち」などとめんどろなことを言わなくても、楽しむことができれば、十分です。

ただし、クラスによっては、ゲームを楽しむことが難しいときもあります。負けることとふてくされて泣き出したり、自分勝手なことをして雰囲気壊したりするような子がいる場合などです。

こういうときに、「ゲームが楽しめるようなクラスになるように、ゲームを活用して取り組む」と考えるようにしています。手痛い失敗を経験したことがきっかけです。

二 成功は失敗の元

以前勤めた学校で、五年、六年と担任し、異動しました。その二年間で様々なゲームを行い、高学年でも、それなりの手応えを感じていました。

この経験があったので、異動先の学校で始業式から間もないころにゲームを行いました。五年生の担任になり、早くクラスの雰囲気をよくしたかったからです。大縄やロンドン橋などをやったことを覚えています。

ロンドン橋は、私ともう一人の子が手をつないで橋をつくり、歌が終わったらその手を降ろします。そのときに、橋につかまったらその子も橋に加わります。

男女で橋を作ることもあります。手をつなぐことに、多少のはじらいや抵抗があっても、そんなことを気にせずどんどんゲームを進めていけば、その雰囲気の盛り上がり

りにつられて、抵抗はなくなっていくます。そう思って、新しい学校の五年生相手に以前の学校と同じように進めました。ところが、子どもたちの反応は、同じではありませんでした。

「こんな奴と手つなげるか！」
と一人の男の子が大声を上げました。

私は、「はいはい、やるぞ」とその男の子の手を引っ張って、先に橋になっていた女の子と手をつながせました。

その子は、私の手を振り払い、
「さわるな、死ぬ」

と怒鳴り、列から抜けて離れて座り込みました。

ここで負けてはいけなないと、気にしないふりをして「じゃあ、続けよう」と他の子に声をかけ、ロンドン橋を進めようとした。残念ながら、期待したようにはいきませんでした。

先の男の子と同じような言葉が他の子からも次々と飛び交い、列を抜ける子が何人も出てきたのです。その女の子は泣きだし、結局、ロンドン橋は中断せざるをえませんでした。

三 失敗は成功の元

失敗を生かして

このときの失敗を反省し、ゲームの取り組み方も慎重になりました。異動した学校では、以前の学校のように多少強引にでも担任が進めれば、仕方なくでも子どもも大多数が指示に従うということは期待できませんでした。

無理にやれば、暴言暴力のきつかけになってしまい、かえって学級経営にとつてマイナスの時間になってしまいます。

まず、ゲームをそういった子どもが取り組みやすいものをそうではないものに分類してみました。以前の私は、ゲームの際の準備物や隊形については考えても、ゲームに参加しにくい子がいる場合の対応などを考えたことはありませんでした。

色々考えた結果、一番シンプルなのは、子どもたちが「ばくだんゲーム」とよぶものでした。クラス全員が円になって座り、ボールなどを回していきます。音楽が止まったときにボールを持っていた子が負けというものです。

それでも…

二年後に六年生を担任したときには、前回の反省から、このばくだんゲームから始めました。

それでも、スムーズにはいきませんでした。このクラスでは、男女一人ずつ、授業妨害を激しく行う子がいました。その二人が、ゲームのときも自分勝手な行動を続けたのです。

ボールをへらへら笑いながらずっと抱え込み「はい、おれの負け」といたり、大声を上げて隣の子の顔にボールをぶつけたりといったことを繰り返しました。注意すると、興奮して暴れ出します。(こんなこともできないのか…)と情けない心境になりました。

それでも、「それなら、ばくだんゲームができるようにこの二人を育てよう」と、何とか気持ちを切り替えました。

週に一回のペースで、あえてばくだんゲームをすることにしました。

簡単には改善しませんでした。回を重ねるにつれ、ふつうに取り組む時間が少しずつ長くなってはいました。

その瞬間目が合つて

あるとき、また例の男の子がボールを他の子の顔めがけて投げつけようとしていました。投げる直前に私と目が合いました。その子は手を止め、「わかったわかった」と苦笑いしながら、ボールを隣の子にそつと渡ししました。ゲームがそのまま進みそうになりました。「ちよつと待つて」と私は大きな声で、出しました。「山本君が、またボールをぶつけそうになったけど、我慢して自分でやめました。そうだね」その子は、照れくさそうにうなずきました。「今まで、たくさん邪魔してきたけど、だんだんそれが減つて、今日は我慢もできたこと、みんなも分かってあげようね」自然に拍手が起きました。

四 方法ではなく、子どもに合わせる

私の一番大きな失敗は、クラスの子どもの実態を考慮することなく、「ゲーム」という方法を強引に進めたことでした。

子どもよりも、方法が先に来てしまう失敗は、学習指導でも、さらには百マス計算できえも、起きうることです。慣れた方法であっても、気をつけていきたいものです。